［医学の立場から］　現代社会が求める医師像とその養成への取り組み

千葉大学　生 坂 政 臣

Ⅰ　最近までほとんどの医学生は卒業直後に、何科の医師になるのかを決定し、その領域を極めるための専門研修を開始した。晩年、多くの医師は開業して専門外の患者の診療も手がけ、この仕組みがわが国のプライマリケアを支えてきた。

　しかし近年、患者の権利意識の高まりと共に、医療に確実性が求められるようになり、期待に応えられない結果には法的手段が取られるようになってくると、医師も解決に自信のある専門の殻に閉じこもり、多様な医療ニーズに応えられなくなっている。

Ⅱ　元来、スペシャリストは成功の割合を高めるために対象を絞り込み、なるべく単純化した形で問題解決を図ろうとする。例えば、外科医は糖尿病などの様々な合併症を有する医学的に複雑な患者の手術応諾には慎重になる。

　一方、ジェネラリストは、より複雑な問題に対応できるように、解決できるレパートリーを増やそうと努力する。結果の確実性を高めるために扱う対象を狭めるのか、まずはすべての患者を対象にしようとするのかが、スペシャリストとジェネラリストの発展方向の根本的な違いである。

　両者とも重要であるが、我が国のジェネラリストはスペシャリストに比べて圧倒的に少ない。

Ⅲ　旧来のスペシャリストがジェネラリストとして医療を提供する仕組みは、医学の急速な進歩のために双方ともに高いレベルを維持することが難しくなっている。スペシャリストは得意分野を持とうとし、ジェネラリストは苦手分野を持たないよう努力する。得意分野を持てば、少なくとも相対的には得意でない分野が生じることを考えると、同一人物の中での両立は理論的にも容易でない。

Ⅳ　科学技術の単純応用では解決し難い複雑な問題を抱える現代社会は、閉鎖性を脱却した越境性と複合的な問題の解決につながる実践のパラダイムシフトを求めており、その回答のひとつがジェネラリストの養成だと考える。

　しかし厳密性を好む理科系医師は精度の高いスペシャリスト志向が強くなるため、不確実な世界で働くことが求められるジェネラリストの自然増は期待できないことが医療先進国共通の認識である。

　そのため欧米諸国ではスペシャリスト数の制限や、奨学金などのジェネラリスト養成のための様々な政策が施行されているが、わが国ではそのような対策はほとんど取られていない。

　シンポジウムではわが国におけるジェネラリスト養成の課題と展望を述べたい。